

デシャルム大尉の草津温泉紀行 —— 欧米人による最も古い草津紹介 ——

澤 護

昨年春、久しぶりに草津へ旅した。泊った宿の主人とあれこれ雑談を交わしているうちに、草津を欧米に最初に紹介したのはだれかとなった。宿の主人は、当然という顔でベルツ (E. Bälz) だろうといった。確かに、草津といえばベルツというほど彼の名前は有名だが、彼が東京医学校の生理学・内科学教師として来日したのは1876年(明治9)6月のはずで、初めて草津の土を踏んだのは1878年だったはずだ。この記憶が正しければ、ベルツより5年も早く草津を訪れ、温泉の観測や成分の推定をして、横浜でその発表をした人物にフランス人のデシャルムという陸軍大尉がいたことを話した。

草津温泉史に詳しい主人は初めて聴いた名だとしながら、県史、市史をはじめ多くの草津温泉に関する文献を持ちだしてきたが、そのいずれにもデシャルムなる名前はないという。それではということで、郷土史に造詣の深い史家に連絡をとり、宿まで来てもらうことにした。この老齢の郷土史家も、デシャルムは知らないということであった。幸い、デシャルムの報告は手元にあるので、そのコピーを郵送することを約束して別れた。

帰京後、かなり意識的に草津温泉関係の刊行物を読んでみたが、手にしたいずれの書にもデシャルムの名前を見いだすことはできなかった。考えてみれば、デシャルムの事績を追求した日本人はいなく、また彼の草津紀行は1874年(明治7)に刊行された『日本アジア協会紀要』というかなり限られた冊子に発表され、しかもこの紀要は一般には目にすることもでき

ない稀観本にもなっていたから、これもやむを得ないところがある。

本稿はデシャルムの江戸から草津までの行程を辿りながら、彼の証した草津温泉の記録を紹介することを目的にしているが、これは一般に草津温泉史の知られざる記録でもあるだけに、これを機会に地元での調査・研究の対象となり、新しい草津温泉史の1頁となるよう期待したい。

デシャルムには1873年に発表した「江戸より草津への旅行記——付草津温泉の記録」（以下「草津紀行」）と、翌年に発表した「江戸と新潟を結ぶ二街道」の2論文があり、いずれも日本アジア協会の例会の席上で口頭発表され、さらに同会の紀要に掲載された。

この紀要に掲載された旅行記はおよそ30点あるが、その大半は欧米人が自由に国内旅行をできず、外務省などの許可を受けて旅した時代のものが多い。したがって、許可を取り易い立場にあったお雇い外国人の旅行記が多く、これらが後の旅行者たちの案内書ともなっていた。「草津紀行」の紹介に入る前に、日本アジア協会とその紀要とはどのようなものだったのかを簡単に触れておこう。

日本アジア協会の成立と会員

日本アジア協会は1872年7月29日（明治5.6.24）に横浜の外国人商業会議所で設立総会が開かれ、この席で初代会長にイギリス代理公使・ワトソン（Robert G. Watson）、副会長にヘボン（James C. Hepburn）らを選出されて設立された。この設立総会に先立つ2日前の横浜で刊行されていた英字紙に、来たる7月29日午後3時、ロンドンの王立アジア協会（the Royal Asiatic Society of London）の目的にそった協会設立のための集會が開かれ、その司会にはワトソンがあたるという公告がなされ、さらに居留民に対する出席が呼びかけられた。¹⁾

一方、ロンドンでもこの設立総会を報道し、横浜に王立アジア協会の支

部を設立するための集会在先頃開催されたと記事にした。²⁾ 各国に居留したイギリス人は香港、上海、カルカッタなどで王立アジア協会支部を創立し、各地の文学、言語、哲学、風習、考古学などを中心とした人文科学部門の研究団体を指向していったが、彼らは横浜にももうひとつの王立アジア協会支部を作る意向を持っていたことが、先の新聞記事から読みとれる。

しかし、イギリス派の推す支部設立の提案は、グリフィス (William E. Griffis) らアメリカ派の激しい反発に遇い、結局王立アジア協会を名乗らず、日本アジア協会の名称にすることに落ち着いた。この両派の対立は、これに留まらず、後あとまでも尾を引いていった。

このような波乱ぶくみで発足した日本アジア協会の第1回例会は、1872年10月30日にゲーテ座 (Gaiety Theatre, 横浜居留地68番) において35名の出席のもとに開催された。この会合の様子は当時の新聞に詳しいが、³⁾ その内の「ファー・イースト」紙では、なおも王立アジア協会横浜支部の名称で記事にしている。

日本アジア協会の設立年度における構成員は名誉会員2名、在外会員3名、一般会員109名の114名と記録されているが、一般会員の名簿をみると108名の氏名しか掲載されていない。⁴⁾ この国籍の調査はかなりの困難を伴うが、現在のところイギリス人75名、アメリカ人23名を数えることができる。実に8割5分もが英米人で占められ、日本人は森有礼ただひとりであった。もっとも、この割合は明治6年中の横浜居留外国人数982名 (中国人を除く) のうち、イギリス人が453名、アメリカ人が177名であったから、ほぼ妥当な数と読むことは可能かも知れない。

しかし、同じ年度にフランス人が125名も居住しながら、日本アジア協会の会員は0名、151名のドイツ人からの会員はわずか1名で、仏独両国からの同会に対する反発があったものとの予想も可能であろう。事実、1873年には東京においてドイツ弁理公使・フォン・ブランド (Max von Brandt) を会長にし、ドイツ居留民はドイツ東アジア自然民俗協会

(Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens) を結成して、実に盛んな活動をしていった。

一方、フランスだが、横浜における文化的な活動はなく、単に自国民の利益になる保険組合を在横浜フランス局長・デグロン (Henri Degron) を中心に設立したに終わった。横浜でのフランス人は明治6年以降たえず100名を越し、明治30年には274名の多きを数えたにもかかわらず、フランスを中心とする会の結成はみあたらない。ただ、講演会、音楽会や演劇活動をしだすフランス協会が設立されたが、この活動は明治40年代のことであった。

日本アジア協会の例会は、第1回から1873年6月7日の第7回まではゲーテ座を会場にしていたが、1873年10月22日の第8回例会から横浜居留地20番のグランド・ホテルに場所を移した。例会は一般に大月の土曜の午後8時30分から開かれていたため、グランド・ホテルへの移行はとりわけ東京の居留者を喜ばせた。東京に住む外国人教師やお雇い外国人の強い要望から、例会はやがて湯島聖堂や築地居留地54番の教区教会などでも開催されるようになった。

日本アジア協会の大きな特徴としては、まず每例会で発表される広範な日本〔学〕研究の講演にあった。これら講演内容は同会の機関誌『日本アジア協会紀要』に掲載され、日本〔学〕研究の先駆的な役割をはたしてきた。1958年に刊行された同会の紀要によれば、1874年に第1巻第1号が刊行されて、過去84年の間にその数は141冊に昇り、そこに掲載された論文は540点に昇るとい⁵⁾。これら論文は歴史、伝記、社会学・人類学・民族学、政治・政治学・法律、経済学、自然科学、地理などに細かく分類された目録が作成されたり⁶⁾、また発表者のアルファベット順の記録も刊行されたため⁷⁾、この紀要の利用はかなり身近なものになってきた。

ところが、『日本アジア協会紀要』の完揃いは大英博物館、マサチューセッツ州立図書館、ハーバード大学等にはあるものの、国内では国立国会

図書館でさえ部分的に所蔵しているだけであった。このため、ある論文によっては、他国に依頼をしてコピーを求めるという労を必要としたが、それでも1964年にこの紀要の第1期分にあたる1874年より1922年までが、50巻となって国内で覆刻されたため、この貴重であった書はかなり利用し易いものになってきている。しかし、この覆刻本であっても非常に高価で、なかなか個人の手で購入できるというわけにはいかない現状にある。

このため、主に英米人の手になる日本〔学〕研究が満載された紀要であるにもかかわらず、あまり利用されずにきた感がある。したがって、デシャルムの「草津紀行」も極く限られた研究者の目にとまっていたが、これまできちんと紹介される機会もなく、今日に至ったもののようである。

陸軍省雇いのフランス人に夏期休暇が与えられた明治6年、ある者は箱根に遊び、ある者は内地旅行を楽しんだ。デシャルムは8月1日より1ヵ月草津、伊香保、日光などを旅し、それをまとめた。これが1873年（明治6）10月22日の日本アジア協会の例会でまず発表され、次いで11月の英字新聞にほぼ全文が掲載された。⁸⁾

10月22日の例会（「紀要」の記録では、「1873年10月27日の日本アジア協会の席上にて朗読」と記述しているが、22日が正しい）は、イギリス公使H・S・パークスの司会の下で、午後8時30分より居留地20番の横浜のグランド・ホテルで開催された。例会は前回の議事録が読まれたあと、すぐに発表に移った。この夜の発表演題はふたつあったが、まずデシャルムの報告が「草津温泉」（The Warm Spring of Kusatsu）という題でなされ、「ジャパン・メール」の編集長のハウエル（W. G. Howell）が代読する形で行なわれた。

発表後、パークスと英公使館員のE・サトウはデシャルムに感謝の意を表し、その行程が人口に膾炙され、これから旅をする人には大きな指導書になるだろうと讃えた。また、会長のアストンは代読したハウエルに対し、翻訳の労を多とした。ハウエルがあらかじめデシャルムの仏文のテキ

ストを手渡されていて、それを翻訳しておいたものか、例会の直前に渡され、その場で英訳したのかは明かでない。

例会で発表された「草津温泉」は、後日「江戸より草津への旅行記」となって活字化されたが、大まかな内容は次のようなものであった。

「草津紀行」の草津までの行程

「草津温泉はなん百年にも渡って日本で名声をほしいままにしてきたが、この評判を価値づけるためには、今後の現代科学の調査研究に委ねなければならない⁹⁾」との文で、この「草津紀行」は始まる。デシャルムはまず草津の気候が夏期にあっても涼しく健康的であり、しかも江戸や横浜からは比較的に近いので、旅行者やたとえわれわれヨーロッパ人医師にはほとんど知られていない温泉の効用を疑問視しようとも、ヨーロッパ人病弱者を引きつけるであろうし、またここでは中央ヨーロッパの高地にみられる気温と爽快な空気を数ヵ月の間は味わえるとしている。

デシャルムは草津温泉の医学的な効用については、専門家の手に委ねなければならないと語っているので、分析などをする医師らの同行はなかったものとみられる。今までのところ、奥田賢英という日本人がひとりだけ同行したことがわかっている。奥田はこの時陸軍省騎兵科の大尉の任にあった人物である¹⁰⁾。

専門家の同行はなかったものの、デシャルムはパリ天文台で検定済の摂氏55度まで目盛のある極めて精度の高い水銀温度計を携帯した。これが、彼の旅行中の毎日の朝・昼・夜の気温や水温の観測に威力を発揮することになった。

デシャルムの旅行の記録は、1873年8月1日より同月31日までの1ヵ月であったが、次に江戸から草津までの行程を示して、彼の記録に若干の注解を加えておきたい。

8月1日 江戸・桶川間 10里（桶川泊）

この日の行程は、江戸→板橋→蕨→浦和→大宮→上尾→桶川の順であったが、これらの区間の里程も江戸・板橋間2里8丁、蕨・浦和間1里14丁というように記録している。しかし、この里程は郵便配達のために作成された熊谷県発行の「郵便線一覧表」（明治7年刊）や、駅逦寮の原図による「日本帝国郵便線路国郡全図」（明治11年刊）などと比較してみると、細部では若干の差違が認められる。例えば、後書では東京・板橋間を2里15丁33間としているようにである。おそらく、デシャルムはこの里程をなんらかの旅行案内書を参考にして記録したはずだが、その特定はできていない。

デシャルムらは8月1日の早朝に東京を出発したらしく、板橋の午前7時の気温28.5度を早くも観測している。この近くの様子について、「板橋では小さな流れがあって、これが大川とか隅田川として江戸でよく知られた大きな川に注ぐ。蕨（Uwarabi）に到着する前に、この川を渡らなければならないが、そこでは戸田川と呼ばれている。水源は金峰山の東で……¹¹⁾」といったように川の紹介が続いている。

デシャルムは途中の大宮で大休憩をとり、桶川で宿をとったが、この頃の東京・高崎間はおよそ30里で、急ぎの郵便馬車などは早朝6時に東京を発つと、高崎にはその日の夜の7時に到着することができたから、彼の行程はかなりゆっくりしたものであったことがわかる。

8月2日 桶川・本庄間 11里（本庄泊）

この日の行程は、桶川→鴻巣→熊谷→深谷→本庄の順で、鴻巣での午前6時の気温27度を観測している。桶川・鴻巣間は1里35丁であったから、午前5時頃には桶川を出発したようである。夏期における内陸旅行は、早朝の出立が鉄則で、デシャルムもこれを守っている。

「熊谷（Kumagae）は主要な生産地で、木綿と蚕種の大取り引きがここで行なわれ、戸数は1,000から1,200と推定される。

この地方（武蔵国）全体は肥沃で、耕作はいきとどいている。桑は豊富に成育し、トウモロコシ、穀物類、米、綿花も同様である。茶の生産はわずかで、その品質は良くない¹²⁾と記述している。デシャルムは熊谷で休憩したので、若干ここの描写は詳しい。二日目の行程では、戸田川、利根川、本庄宿と例幣使街道などの記述もみられるが、別段興味ある事項はない。

8月3日 本庄・三ノ倉間 12里20丁（三ノ倉泊）

この日の行程は、本庄→新町→倉賀野→高崎→神山→三ノ倉で、新町での午前5時30分の気温25.5度を観測している。因に、本庄・新町間は2里6丁37間であるが、デシャルムは2里と記録している。国の上からいえば、本庄までが武蔵国で、新町より上野国となる。

「新町はさほど重要な地点でないが、道はここから富岡へと通じている（距離6里）。そこに〔明治〕政府はフランス人・ブリュナ氏の監督の下¹³⁾で、模範的な製糸工場を設立した。新町を後にして、利根川左岸の大きな支流（筆者注 鐮川）を渡ると、草津へ至るため中山道と別れを告げる地、高崎に到着する。西の方に噴煙とやや白っぽい煙霧に包まれた浅間山の頂を、また西方から北方と北東に目もくらむような連峰を望める¹⁴⁾」と書いたあとで、高崎は取り引きの中心地で、町は大変に細長く戸数はおよそ2,000戸、ここでの商売は足袋の生産が主だとしている。

高崎でも蚕が育てられているが、その大部分が山繭（Yamamai）であるように思われたとの記述もある。山繭からとれる糸は、絹糸にあって極上品とされ、その幼虫は8センチもの体長になるものだけに、デシャルムはこの幼虫の大きさに驚いたものであろう。彼は飲み水を東京から持参していたが、高崎の水は極めて悪いと表現している件もある。

高崎では大休憩をとったので、どこかのこぢんまりとした茶屋で、その水を味わった実感であったろう。高崎の中心街は約3キロあり、端から

端まで店が並び、夏場には炎天下を歩く旅人のために、道端の屋台では冷やした飲物を売っていた。

旧高崎城内に東京鎮台分営が明治6年に置かれ、同8年には連隊本部が東京から移されたが、デシャルムの耳にはこの時とどいていなかったらしく、ここを訪れていない。

高崎から神山（Kameyama）、さらに三ノ倉（Sannokura）へと至る道は、いよいよ山岳地帯へととなってくる。したがって、デシャルムは人力車より徒歩、馬の背か駕籠での旅を勧めている。神山越えの荷物の運搬は、人力か牛馬の背に頼る他に方法がなかったが、これに関連して、「政府が定めた積荷の重量は32貫、1貫あたり4キロなので128キロであるが、一般に16貫の米俵を3俵を牛馬の背に積んだ。つまり総量48貫192キロで、信じられない重量である。牛馬は悪路を1日あたり9里歩き、後脚は蹄鉄を打っていないので、前脚には草鞋がしっかり装着される¹⁵⁾」といったように、牛馬に関する描写がしばらく続く。

デシャルムは三ノ倉で1泊したが、ここでの旅籠の様子や食事の様子は一切語っていない。「草津紀行」では、彼が泊ったり休息した宿の名前がでてこないが、これは日本アジア協会での発表ということで饒舌を控えたからであろう。

8月4日 三ノ倉・須賀尾間 7里半（須賀尾泊）

この日の行程は、三ノ倉→大戸→須賀尾のわずか7里半であったが、これは前の夜に三ノ倉に着いた時には激しい雨に降られ、この日の出発がかなり遅れたことと、三ノ倉から大戸へ至る道はかなり険しい登り坂であったからである。

大戸では記録するようなものはなにもないが、大層景色のよい所で、昔は神聖な場所であったと言えるようだとしている。大戸は上野国吾妻郡に位置し、草津に至る要所であったから早くから開けた村であったが、大

戸，萩生，本宿，須賀尾など過去の地名を伝える坂上村付近を散策しても，デシャルムのいう神聖の場所とはなんであったかの特定はできなかった。大戸から須賀尾まではあちこちに麻畑がみられ，それがもっと先まで続いていたと彼は書いたが，この景観は今も望める。

「須賀尾は資源のない実に寂れた村で，そこでは見すばらしい旅籠でさえみつけるのは難しい¹⁶⁾」と語ったが，確かに須賀尾は交通の上からいえば行き止まりの村である。それでも，デシャルムはこのどこかの農家かに一泊した。このような村では，陸軍大尉がしかもフランス人の来村とあっては，村あげての歓迎があり，またなんらかの記念品が残されたりしているものだが，それを突き止めることはできないでいる。

8月5日 須賀尾・草津間 6～7里？

この日の行程は，須賀尾→長野原→草津の最終往路であった。デシャルムはここでの里程を6里か7里と疑問符をつけているが，これは彼が参照した書物に須賀尾・長野原間の里程が示されていなかったからに違いない。

大戸・長野原間は5里，長野原・草津間は3里半であるが，須賀尾・長野原間の里程を示した記録はない。須賀尾に郵便局が設置されたのは明治15年で，この時でさえ郵便脚夫は須賀尾から長野原へ直接至る山道はとらずに迂回した。このため，この間の里程は郵便線路図にあっても記録されなかった。

「須賀尾から長野原への道は一層険しく，景観はすばらしいものになる。長野原に到着する前，昔ながらの橋を通るが，川底は深く，急流が土手のずうっと下を流れていた。水源はいろいろだが，特に浅間山の北面と横笹山から流れでてくるものだった……3里ほどなんとか歩いたすえに草津に到着する¹⁷⁾」と，東京を発って4日目で，やっと目的地の草津に無事に着くことができた。この日の気温は，正午で23度を指していた。

草津とその近郊

デジャルムは8月5日より同16日まで草津に滞在したが、「草津は現在(1873年)100軒そこそこの家々から成り、周りには無数の温泉が湧きだしているが、それはいたるところでといってもいいぐらいだ¹⁸⁾」と最初の印象を語っている。

「草津村はかつては大きく、1,000軒の家々があったといわれている。1872年(筆者注 1869年の誤り)に起きた火災で村はほぼ全滅してしまい、今やっとその廃墟から立ち直りつつある。ひどい病気を癒そうとここにやってくる日本人の数は非常に多く、間借り部屋をみつけるのも難しい。草津では最下級の日本人、その大半はぞっとする病気を患った人たちを目にすることを述べておきたい。最も設備のよい茶屋は村の中央にある中川(筆者注 中沢の誤りか?)で、ここには極く低温の温泉があるので、沸きたつ湯に慣れていないヨーロッパ人にとっては最適である。ところが、この茶屋は日本人下層階級の溜まり場で、騒々しさに大変迷惑を蒙ることになり、夜は夜で芸者、三味線の伴奏と酔客の罵声で過ごすことになる。この災難についてのヨーロッパ人の不平は無視され、どちらかといえば宿の主人はヨーロッパ人宿泊客より、なにひとつ彼の機嫌を損わない一般の日本人利用者を好んでいる。外国人に対する物の値上り傾向は、数日後には細々した点で目にみえて現われ、これは年々増していくことであろう¹⁹⁾」と不満を述べている。

草津では山女と鮎がみられ、卵は豊富にあるが鶏と鴨はかなり少ないこと、冬場には野兎、雉、猪、鹿狩りを、時には熊狩りさえ楽しめることを語っている。

次にデジャルムは草津の気候に触れ、夏場にあってはヨーロッパ人の要望にぴったりだとしている。朝と夕方は涼しく、夜間はときとして寒くもあると語り、最高気温は26度以上は観測できなかったこと、最低気温の方

は夜間の正確な温度を測る温度計を持っていなかったが、8月中でも18度まで下がるようだと述べている。

飲み水は豊富で、中でも中川屋近くの11.5度、時として10度にもなる水がすばらしいこと、地震はめったにないから住民はそれに無関心でいること、屋根の上には大きな石の重しがしてあり、この独特の光景は三ノ倉からみられること、10月末から5月中旬頃まで湯治客は草津を離れてしまうことなどを語っている。

次に、デシャルムは草津温泉の全般的な様子を描写しているが、この個所は草津を歴史的な面から展望するには大いに役立つ。つまり、草津村の中央に大きな長方形の湯槽があって、ここに近くで湧きだす湯が集められているが、55度から70度という高温の温泉を転化するに、このかなり古い時代に建てられた湯槽は有用のものだったが、先の火災で消失してしまったこと、温泉の温度は1日になん度も変わり、最高は真昼頃に、最低は日の出時であること、かつては主要な流れであったものが年と共に細くなり、涸れてしまった急流の乾いた川底が「西の河原」と呼ばれていること、ここに手で触れると動かせ、また平衡を取り戻すゆるぎ石があり、「ゆるぎ石」(Irugishi) と呼ばれていること、無数の石があたりに連らなっている「鬼の相撲場」のことなどに触れ、かなり草津滞在を満喫している。

また、彼は村の近郊には美しい景勝地、急流、見事な森なども見られ、有名な火山である浅間山の噴火口からは絶えず噴煙が吐き出され、暗夜にはその強烈な閃光が6里先からも望め、これが観光客にはまたとない魅力になっていると草津の宣伝をしてさえいる。

この後、デシャルムは全く医学分野の領域だがとしながら、草津温泉の組成と効用とを語り、成分は硫黄、明礬、丹礬、砒素 (Arsenic, Yosiki), 礬砂で、これらは温泉によっては混じり気がなかったり、混ざりあったりしていて、温度の方は38度から55度、60度、70度とそれ以上と報告している。しかし、彼は温泉のサンプルを江戸で科学的に分析すれば、一層正確

な結果が得られようとしているので、湯に含有された成分を実際に彼自身の手で分析したのかは疑問が残る。

デシャルムは例会の席上で、地元でかなり昔に刊行され、この地の主要な温泉場やその湯に適応する病状を書き留めた一書を示し、これを翻訳した。この書の原著の記載はないが、彼によれば「入湯案内記」(Niutōannaiki) であるという。

草津温泉に関する稿本、古刊本は割に数があり、「上州草津温泉奇効記」、「上州草津温泉物語」、「草津温泉一覧」など知られるが、光泉寺の刊行になる「温泉奇効記」か、ずばり「入湯案内記」のいずれかと想像している。しかし、いまだ確証が得られない。

「入湯案内記」の翻訳

ここで取り扱われている温泉は、①御座の湯、②熱の湯、③脚気の湯、④綿の湯、⑤滝の湯、⑥鷺の湯、⑦松の湯 (Mansu no yu)、⑧千代の湯、⑨地蔵の湯、⑩金比羅の湯、⑪玉の湯、⑫瑠璃の湯、⑬白寿の湯 (Shirasu no yu)、⑭熱川の湯 (Niegawa no yu) だが、他に中沢茶屋の湯と目洗い湯についても記録している。これら温泉のうち、デシャルムが草津を訪れたときには、すでに⑧、⑫、⑬と⑭は火災などで消滅してしまっていた。

この翻訳はところどころ難しかったものとみえ、文章中に「本文の意味あいまい」と括弧で示した個所がある。例えば、デシャルムの講演の後で活字になった新聞記事で、原文らしい「Do kadzu oki yoriwa hi kadzu okiwo yoshi to sa.」を意味不明としながら、“In generally it is well for a given number of baths to take an increased number of days.” と訳しているようにみえる。²⁰⁾ なにか暗号みたいな日本語だが、この個所の英文は翌年に刊行された「紀要」では、“In general rather than decrease the daily number of baths it is better to intermit a day if necessary.” に訂正され

ている。²¹⁾「ドカズオキヨリワヒカズオキヲヨシトス」と読める原文と、先に示した温泉の名称から、おそらく彼の訳した原著を探しだすことは可能のように思われる。「温泉奇効記」と「入湯案内記」の原本に接する機会は、これまでなかったので多くを語れないが、いずれも明治以前に書かれたものなことは確かであるようだ。これらの書が地元に残されていれば、いずれは比較して結論をだせるであろう。

明治6年当時、御座の湯など10ヵ所の共同浴場があり、旅籠に温泉を引いているのは中沢茶屋一軒だったらしく、いかにも湯治場らしい草津の情景である。

「入湯案内記」の翻訳はかなりの長文で、内容的には温泉の成分や効果をも示しているのが面白い。なお、この一部分は明治7年の英字新聞では省略され掲載されなかった。

「草津より日光へ」と「日光より東京へ」の行程

1873年10月22日の例会では発表されなかったが、この日の結びとして、デシャルムは草津を旅する人には、やはり温泉でもある沢渡と伊香保に数日滞在し、日光を經由して江戸に戻ることを勧めたこともあって、「紀要」が刊行される段になって、彼の草津から江戸への復路の旅程が追加の形で掲載されることになった模様である。

デシャルムの復路の行程は次のようなものであったが、欧米人による伊香保などの紹介も最も古い記録であるだけに、これも地元の人に正当に評価されることが望ましい。

草津から日光へは山越え（筆者注 金精峠のことか？）する方法もあるが、この山道はかなり探し難く、しかも険しいので、荷物を持つての旅は無理で、人夫や運搬用の牛馬もはたしてみつけられるかわからないとの理由により、彼は10里ほど遠回りになるが平坦な道を選

び、8月18日に草津を後にした。

8月18日 草津・沢渡間 約9里（生須泊）

「道は岡を越え谷を渡り、その景色はまるで絵のよう。頂に白い雲を被った浅間山の景観がどこからも望まれる²²⁾」と、この日の様子が書き始まる。ここに、1873年8月にひとりの陸軍顧問団のフランス人将校が浅間山に登り、観測をしたとの記録がある。個人的に気になる一文で、デシャルム以外の同行したフランス人であるのか、デシャルム自身であるのかははっきりしないが、明治6年にはもう浅間山についてなんらかの観測をしたフランス人がいたことだけは確かである。

草津より沢渡までの山道を通ると、同じ吾妻郡の六合村や四方村を通過したはずだが、デシャルムの記録にない。したがって、8月18日の宿泊場所が不明であるが、六合村の生須だったと判断される。当時、六合村大字生須で旅籠を営んでいた市川家に、今も一卓の座卓が残されていて、この裏には筆字で次の銘が書かれている。

「干時明治六年 酉第八月

東京元彦根邸内住

御雇陸軍大教師

仏国人 テシャルム

同断 日本人 奥田賢英

右兩人御入浴止宿之節新調」

この座卓の銘は、さまざまの未知の部分語ってくれているが、これにより生須泊りが間違いないもので、草津・沢渡の経由地が明確になった。また、奥田という陸軍大尉が同行していたが、フランス人は他にいなかったことが知れ、したがって浅間山に登ったフランス人は、デシャルム本人であることなどを証明してくれた。

115年も経過して今も市川家の茶の間にあるこの座卓は、デシャルムの

草津旅行で唯一残されている記念品で、貴重な歴史の証言でもある。

8月18日の夜は生須の市川旅籠（山市屋）で1泊したデシャルムらは、翌日沢渡へと向った。「沢渡には、村の入り口によい旅籠屋があり、ここの温泉は草津の湯に似ているが、それほど強くはない。残念なことに浴槽はなんとなく汚らしく……」²³⁾と綴っているが、彼の薦める旅籠の名を明記していないのが口惜しい。

草津より沢渡の里程はおよそ9里で、デシャルムも1日のコースと紹介しているが、彼はこの間に2日を費やしているのはすでに記述した通りである。

8月20日 沢渡・伊香保間 約2里（伊香保泊）

沢渡から伊香保に至る行程の記録はないが、中ノ条や渋川を通過したはずである。この行程が通常の通り道で、その里程は9里半ほどなので、デシャルムの示した約2里は9里の誤記であろう。沢渡から中ノ条まででも2里18丁強あり、いずれにしる2里では行く着くことはできない。

沢渡から伊香保への「道のりは大変に美しく、登っては下っていく……伊香保は大きな村で、高地にテラスの型で段々に建てられている。ここからは広大な平地と流域を見渡せ、いくつもの支流が利根川の左岸に注いでいる。村の入り口に近く、中心街の右手に千明（Chigira）という大層上等の旅館があるが、ここの部屋からの眺めは壮大であり、また温泉がここに引かれているので、入浴は簡単にできる。湯舟は清潔で行き届いているが、ヨーロッパ人にはやや高めの温度なだけに、入浴前のある程度冷やす必要がある。この温度は摂氏45度から48度である」²⁴⁾と書いたが、デシャルムはここで初めて彼が泊った旅館を明記した。

伊香保には千明や小暮という有名な旅館がいくつかあって、千明三郎とか小暮八郎湯館は特に有名であった。おそらく、デシャルムは千明湯館が気に入り記録に残したのだろう。草津の湯はかなり強いので、肌を柔げる

ために、草津の後で伊香保の湯をと薦めてもいるから、なにかほっと安堵するものがあったのかも知れない。伊香保は樹木に囲まれ、大変しのぎやすい気温で、草津より病弱者の数は少ないから快適に過ごせるとの紹介は、横浜の居留者の関心を大いに魅いたことだろう。外国人による伊香保の記録も、やはりデシャルムのものが最も古い。

8月22日 伊香保・高崎間 約6里（高崎泊？）

伊香保から高崎へは柏木路と渋川路の2道があったが、「道は美しく、谷への下り²⁵⁾」としか書いてない。里程からみて、柏木道を通ったものとみなされる。

8月23日 高崎・太田間 10里半（太田泊）

この日の行程は、高崎から倉賀野→玉村→五料→芝→境→木崎→太田の順であった。芝村に到着する前に、利根川の大きな支流にぶつかる以外になにも書いていない。ただし、玉村のことを「五村」(Gomura)と記載しているので、デシャルムが参考にした印刷された日本語の旅行案内書には、「玉」を「五」と誤って印刷してあったようである。

高崎から倉賀野の里程は1里19丁で、この道は平坦で、往来は混雑するところだったから、ここの描写のないのはわかる気がする。倉賀野から狭い間道に入り、先を進むと玉村に至るが、玉村は商人と高崎の軍隊を相手にした淫売宿の多かったところである。ここから1里半で五料に着くが、ここで利根川を渡り芝村に向かうことになる。また、木崎と太田の間で渡良瀬川を横切ったはずだが、これら渡しの記述もほとんどない。

8月24日 太田・栃木間 10里（栃木泊？）

この日の行程は、太田→八木→梁田→川崎→佐野→富田→栃木の順で、八木からは下野国に入ることになる。「旅行者は太田、佐野、栃木、鹿沼の

かなり大きな村々を通過するが、これら主要地はそう感じはよくない。なにしろ、村人たちは外国人旅行者を目にすることにいまだ慣れていないので、宿をみつけるのもやや難しい。これらの大きな村で休息しようとするのであれば、あらかじめ下僕を送って情報を入手するのが最善である。土地の警官は往々にして引込み思案である²⁶⁾」

この道筋は例幣使街道であるから、人の往来ははげしいものがあったのだが、旅籠がみつからないというのは面白い。確かに、明治10年代に入ってからでも、この辺を旅した欧米人の旅行記を読むと、梁田は全村ほとんど女郎屋、佐野（天明）は立派な建物が多くみられるが店は稀、外国人はじろじろとみられると書いたものが多い。たまたま一流とおぼしい旅籠に部屋をとれても、宿の主人は気難しかったり、外国人向けの料理をするのが気に入らなかったり、その上48度もある風呂で水を差すことを赦さなかったりと、宿探しは難しかった。

ところで、デシャルムは八木（やぎ）のことを、「Achigi」と記録した。この「アチギ」なる地名を確認するのに、古地図や線路図を調べたものの不明で、かなりてこずった。太田より梁田へ至るのであれば、福居、足利、北猿田といった村を通ったであろうから、「アチギ」もこれらの地名の途中か、その延長線上にあるものと予想していたが、八木が浮かび上ってきた。八本の大きな並木があったことから生まれ、八木節の発祥地ともいわれる八木なる地名は、明治6年当時には確かに下野国足利郡にあった。しかし、明治7年中には梁田郡の福居に合併されたものらしく、明治初期にはこの地名は消えてしまった。

一方、福居も郡名は足利郡に代り、明治30年代には足利郡御厨村大字福居となってしまっていたため、この地名の割り出しはことのほか困難で、このためこの一帯の実査は怠ってしまっている。デシャルムは八木をまず「Hachigi」と読み誤り、無音のhから「Achigi」としてしまったように思われる。

8月25日 栃木・板橋間 10里（板橋泊？）

この日の行程は、栃木→合戦場（Kassumba）→金崎→奈佐原→鹿沼（Kanama）→文挾（Fumibami）→板橋の順であった。この間の里程は、郵便線路図によれば9里弱なので、約1里の差が認められる。この行程での地名の読み方だが、鹿沼の「カナマ」は印刷の単純なミスだろうが、合戦場は「カツセンバ」、文挾は「フバサミ」と読むのが正しいはずである。また、「草津紀行」での本文中に、この下野国板橋を「Habashi」としている個所があるが、これも「Itabashi」が正しい。

「奈佐原に到着する前に、おそらく世界でも比類がない実に美事な杉並木が始まる。日光に至るまで、街道の両側に二列の杉が植えられているが、これは300年前に権現様の継承者が日光を発見した時、住んでいた大名が植えたものだといわれている。

近隣の百姓がこの周囲の草地や藪に火をつけるのは困ったことで、すでにこれまでもなん度かこのすばらしい街道を焼いてきており、いつの日にかすっかり破壊されてしまいかねない。当会の会長から、この点に関し日本政府に注意を喚起して戴くよう、あえて申し述べてもらえないものでしょうか²⁷⁾と語っている。

松平正綱が日光・今市間をはじめ、例幣使街道などに20万本を越す杉木の植林を完了したのは1648年（慶安5）のことであった。大正時代の記録しかみていないが、日光・今市間は約2850本、今市・菊沢間は約9650本がこの時に残っていたから、デシャルムのみた時代の数はもっと多かったに違いない。この付近の老杉路は多くの観光客の目を楽しませただけに、後の欧米人の旅行記にもよくみられる。

デシャルムは奈佐原に至る前に杉並木が始まると語ったが、これは鹿沼からの景色ではなかったろうか。この夜は下野国板橋に一泊したようだが、ここはかなりみすばらしい村で、くつろげる旅籠は一軒もなかった。

8月26日 板橋・日光間 4里（日光泊）

板橋から今市を経て日光までは、やはり杉並木の美事なことを触れているだけである。日光については、これまでもすでにいくつもの敘述がみられるので、特に語ることはないがとしながら、「毎年8月24日から30日まで、日光と聖なる湖へ向う大勢の巡礼者で街道筋はいっぱいになることを、旅する人に注意をしておきましょう。この巡礼者の集いは大変興味深いものではありますが、同時にこのため街道はかなり味けないものになってしまう。この大勢の人たちにいらいらさせられない宿を見つけるのは難しいこと28)です」とだけ述べている。

日光の印象は悪かったものとみえ、デシャルムは8月26日から29日まで4泊もしながら、ここの敘述はない。

明治6年（1873）6月、ヘボンは妻・クララを連れて日光に遊び、後に日光金谷ホテルを建てる金谷喜一郎宅の座敷の一部を借りてひと夏を過ごした。金谷はヘボンの指導の下に、欧米人のための避暑用の宿を開くことになったが、デシャルムがこの時にここを訪ねればヘボンに会えたはずだ。しかし、デシャルムの記録にも、ヘボンの日記にもふたりの邂逅を示した文章はない。したがって、デシャルムが日光で泊った宿は、明治4年の創業になる鈴木喜惣次の鈴木屋であったろう。

8月30日 日光・宇都宮間 10里13丁（宇都宮泊）

日光から宇都宮へは大沢と徳次郎という小村を通過したが、ここには人力車の車夫を目当てにした一膳めし屋があっただけだから、この辺の様子は一切語っていない。また、宇都宮は大きな繁栄していた町だから、宿の心配はなかったと思われるが、明治10年代に入っても外国人に慣れない宿側では、全部屋満室と断わることが多かった。このような場合には、たいていパスポートを提示して警察に訴え、部屋をみつけてもらうことになるが、このようなことを宇都宮で体験したイギリス

人の紀行も残されている。

8月31日 宇都宮・東京間

宇都宮を出発した後の記述はないが、小山→古河→中田→粕壁→草加(Sôga)→東京(Tôkei)のコースを取ったものと思われる。ただ、デシャルムは「雨や雪解け水で川が増水している季節に旅をしたなら、気持よくしかもそう疲れることもなく江戸に帰れる。それは利根川筋の古河で貸し船に乗ることで、そうすれば、江戸へ、日本橋へも10～12時間で運んでもらえる²⁹⁾」と語っているので、彼も古河から舟便を利用した可能性がある。この年の8月29日と30日は日光やその付近は激しい雨だったから、利根川も水嵩が増えていたはずである。

古河から東京まで日光街道を上ってくれば、その里程は17里ほどであったから、少なくとも2日はかかる。このため、大抵の旅行者は舟便を利用していた。特に、明治10年に内国通運会社によって東京深川の扇橋と古河とを結ぶ洋式の川蒸気の通路が開かれると、日光詣はゆっくりくつろげる川蒸気船の利用が一般的になっていった。

デシャルムは人力車で宇都宮を午前6時に出発したとすれば、この間の里程は8里強だから、途中の小山、間々田、友沼、野木の街道筋は小石のごろごろした悪路であっても、11時頃には古河に着けたろう。ここで貸し舟に乗り、扇橋から彼の宿舎である永田町の元彦根藩邸・井伊掃部頭邸に人力車を飛ばせば、8月31日の深夜には戻る事ができたろう。たとえ陸路を通っても、9月1日の夜には帰郷したものと思われる。

「草津紀行」の日光・江戸間の描写は極めて簡単で、なんらみるべきものがない。せめて、泊った旅籠や休息した茶屋などを明記しておいてくれたなら、追跡・調査はかなり容易となり、われわれにとっては興味ある事績を掘り出せるかも知れず、それが惜しまれてならない。

一般に自由に国内旅行をできなかつた時代に、軍人や宣教師らは内陸に入り、その体験を語り記録した。明治6年に「日本アジア協会」で発表された紀行は、「草津紀行」の他にブラキストン (T. W. Blakiston) の「日本北東紀行」、ブリッジフォード (S. T. Bridgeford) の「蝦夷紀行」、ローレンス (C. W. Lawrence) の「常陸・下総紀行」があった。翌7年にも、三国峠を越えて新潟への旅を实践したリンドウ (J. A. Lindo)、青森から新潟へ旅したガビンス (J. H. Gubbins) の紀行などを含め5回に渡って日本内国紀行や踏査の発表がなされ、いずれも「紀要」に掲載された。

これらの紀行は、それぞれの地を欧米人に知らせた最初のもので、後にここを訪れる旅行者の案内書として重宝されることになった。また、われわれにとっては、これら多くの紀行が100年前の日本を知る貴重な情報源ともなる。この内容は豊富で示唆に富み、概して客観的な目で眺め、当時の可能な状況を丹念に綴っているのも、資料として一級のものがある。

近年、地方史の研究や見直しは盛んだが、この「紀要」に発表された数々の論文や欧米人の手になる旅行記などは、あまり利用されず見逃がされているのは残念なことである。

デシャルムの来日・謁見・叙勲

文久年間に、幕府は陸軍の戦力強化を目的として三兵編制を実施し、訓練を試みたものの、優秀な教官がいなかったことから効果が上がらず、このためフランス公使・ロッシュに本国より陸軍教師の派遣を求めた。この要請に応じたフランス側は、さまざまな分野の15名の陸軍将校・下士官15名をまず派遣してよこした。

1866年11月19日にマルセイユを出航した一行は、途中のスエズと上海で船を乗り継ぎ、1867年1月13日に横浜に到着した。この第一次陸軍顧問団15名のひとりに、デシャルム騎兵大尉がいた。

しかし、まもなく幕府は崩壊し、箱館戦争に荷担したブリュネらを除く大半は次々と日本を後にした。デシャルムも1868年10月16日に、フランス郵船にて日本を去った。

1872年5月17日（明治5.4.11）、6名の将校と10名の下士官16名が第二次フランス陸軍顧問団として来日したが、この将校にデシャルムが含まれていた。この時の契約は月給350円で、1875年4月11日までの3年であったが、この日よりさらに2年の雇い継ぎが認められた。1875年の段階で、彼は騎兵少佐に昇進しており、月給も380円に改められた。

しかし、契約中の1876年2月14日に解傭され、翌15日のフランス郵船にて横浜より帰国した。この途中解傭の理由は不明だが、他にルボン砲兵大尉も同じような処置がとられているので、フランス側で必要な人材だったために、なんらかの帰国命令があったものとみなされる。

1872年10月22日（明治5.9.20）謁見

この日の謁見は、教師首長のマルクリー参謀中佐、デシャルム騎兵大尉、ルボン砲兵大尉が仰せつかった。陸軍省としては最も早い謁見で、来日を伝える拝顔であった。なお、将校であれば満期解約の折には、帰国に付き謁見を申しでたものであったが、デシャルムの場合も帰国の折（1876.1.27）に謁見を受けている。

• 勲四等旭日小綬章 1877年（明治10）12月13日

功労著しき者として、ジュールダン工兵大尉と共に叙勲を受けているが、いずれも帰国後の叙勲であった。

• 勲三等旭日中綬章 1884年（明治17）9月8日

ルボンらと共に贈与されたが、この時デシャルムは在イギリス大使館付き騎兵中佐の任にあった。この叙勲理由は、拙稿を参照願いたい。³⁰⁾

• 勲二等瑞宝章 1895年（明治28）3月11日

この加賜の理由は、「日清事件ニ際シテ間接ニ我利益ヲ計リ軍事上裨益ヲ與フル不³¹⁾勘候」ということで、陸軍大臣・西郷従道と陸軍次官・児玉源太郎よりの申し立てであった。この時、デシャルムは騎兵少将で、胸甲兵第二旅団長の任についていた。

- 注 1) The Japan Weekly Mail, 1872. 7. 27.
2) The Illustrated London News, 1872. 9. 28.
3) The Far East, 1872. 11. 1.
The Japan Weekly Mail, 1872. 11. 2.
4) The Transactions of the Asiatic Society of Japan, Third Series Vol. 14, pp. 352-354.
5) Ibid. Third Series Vol. 6, p. iii.
6) Ibid. Third Series Vol. 6, pp. 8-55.
7) Ibid. Third Series Vol. 14, pp. 394-446.
8) The Japan Weekly Mail, 1873. 11. 15, pp. 816-819.
1873. 11. 22, pp. 838-839.
ただし、「紀要」に掲載された「草津より日光，日光より江戸への紀行」は、これらの号にはなく、例会当日には発表されず、紀要に掲載する段階で追記されたものとみられる。
9) The Japan Weekly Mail, 1873. 11. 15, p. 816.
The Transactions of the Asiatic Society of Japan, S1, Vol. II. p. 25.
10) 『掌中官員録 全』（明治7年），45頁。
11) The Transaction of the Asiatic Society of Japan, S1, Vol. II. p. 28.
12) Ibid., pp. 28-29.
13) P. ブリュナについては、拙稿「富岡製糸場のお雇いフランス人」（「千葉敬愛経済大学研究論集」第20号）を参照されたい。
14) The Transactions of the Asiatic Society of Japan, S1, Vol. II. pp. 29-30.
15) Ibid., pp. 31-32.
16) Ibid., p. 32.
17) Ibid., pp. 32-33.
18) Ibid., p. 33.
19) Ibid., p. 34.
20) The Japan Weekly Mail, 1873. 11. 15.
21) The Transactions of the Asiatic Society of Japan, S1, Vol. II. p. 42.

- 22) Ibid., p. 49.
- 23) Ibid., pp. 49-50.
- 24) Ibid., p. 50.
- 25) Ibid., p. 50.
- 26) Ibid., p. 51.
- 27) Ibid., p. 51.
- 28) Ibid., pp. 51-52.
- 29) Ibid., p. 53.
- 30) 拙稿「ジョルジュ ルボン」(『敬愛大学研究論集』第35号)。
- 31) 『叙勲』明治28年 卷三 No. 15.

[付記]

『青い目の旅人』(みやま文庫 昭和59年刊)に、「デジャルム大尉」(今井貞三郎)としてこの紀行の部分訳が掲載されている。